

## 年間第8主日

第1朗読 シラ書 27・4-7

第2朗読 一コリント 15・54-58

福音朗読 ルカ 6・39-45

2025.3.2 9:30 ミサ  
カトリック高円寺教会  
主任司祭 高木健次神父

今日の福音の最初には、「盲人が盲人の道案内をすることができようか」（ルカ 6・39）という言葉が出てきました。聖書の中で目が見えないっていう状態は、ファリサイ派の人たちと関連付けられて語られることが多いとすることができます。

マタイの福音書では、まさにイエス様がファリサイ派、つまり、神様の教えを自分たちがよく知っているし、自分たちがそれを実践しているのだという思いの中にいる人たちですけれども——ちなみに、その神様の教えというのは古代の世界においては全てを表しますから、現代のように一部分の宗教的な知識っていうことではなくて、世の中全体あるいは人生の生き方について自分たちこそが一番知っているっていう、そういう全体的な思いを含むわけですけども——そういうファリサイ派の人たちに向けてイエス様は「あなたたちは盲人の道案内をする盲人だ」というようなことが出てくるわけなんです(マタイ 15章)。

また、ヨハネの福音書では、生まれつき目の見えない人の目を見えるようにしたっていうイエス様のしるしを受けて、そういうことをなさるイエス様ってどういう人なんだろうっていうことで論争が起こって、ファリサイ派の人たちは頑なにそれが善い業であるということを受け入れないっていう場面が出てくるわけです。そして最後には、「わたしたちが目が見えないって言うつもりか」ってこのファリサイ派の人たちが言い出すと、イエス様が、「目が見えないんだったらまだいい。だけど自分が見えるって言っているから、罪が残る。もうどうしようもないんだ」っていうそういう結論でお話が展開していくこととなります(ヨハネ 9章)。

イエス様が悪霊を追い出したり、色々な病を癒したり、力のある業をする。悪霊でもイエス様の力の前には従うわけですけども、そんなイエス様でもどう

することもできないのが、自分が正しいと思って、そこから一步も動こうとしない人ということになるわけです。そういう意味で——言うまでもないことですが——この福音書の中で、また今日のみことばの中で言われている盲人、目が見えない状態というのは、肉体の目ではなくて、心のあり方ということになるわけです。

ルカの福音書では、今日の言葉が直接ファリサイ派の人に向けられているというわけではないわけですが、ルカの福音書の続編——というか、第1部がルカによる福音、第2部が使徒言行録という、同じ著者たちによって書かれた上巻・下巻なんだということはもう定着しているし、皆さんも聞いたことがあると思いますが——その使徒言行録の中で、目が見えないってことの一番有名な登場人物がパウロです。今日の第2朗読もわたしたちはパウロの手紙を聞きましたけども、そのパウロは最初ファリサイ派で、イエス様を信じるキリスト信者たちを迫害している人でした。でも突然、イエス様に呼ばれたときに一時的に目が見えなくなって、そして、アナニアという人に手を引かれてダマスコの町に入って来るっていう、誰かのお世話になる、そういうような経験を経て、今度は熱心にイエス様のことを宣べ伝える人に変えられたという話が出てくるわけです（使徒言行録9章）。

そんな風にして、自分こそが分かっているし、自分が他の人を導きお世話してあげるんだっていう、その思い込みこそが、今日の福音の中で出てくる「目の中にある丸太」、大切なことを見えなくしてしまうものと言うことができるのではないかなと思います。

でも、このお話を、福音書を読んでそういうことを聞いて、「ああ、昔のファリサイ派の人は、また昔のイエス様の時代のユダヤ人はバカだなあ。わたしたちは良かった、キリスト信者で」って思うならば、実はそのファリサイ派と同じ過ちへの道をわたしたちもたどることになるわけです。わたしたちはキリスト信者ですけども、キリストではないんです。だから、正しいことを完全には分からないし、でもだんだんいろんな人に助けをいただきながら、また神様の恵みに導かれながら、だんだん分かってくる。それは自分の力ではないのだということを絶えず思い起こすのが、神様を信じるということなんです。

でも時々、神様を信じているうちに、なんとなく、神様に対しては謙遜かもしれないけど、周りの人に対しては自分が神様なんじゃないかっていうふうに勘

違いしてしまうという、そういう危険というか、罨が信仰の道にはあるのではないかなと思います。正しいのがわたしで、間違っているのがあなたですって——口には出さないかもしれませんが——そういう気持ちというか、そういうような態度の中で振る舞ってしまうというようなことがあるのではないかなと反省します。

神様を信じるということは——繰り返しになりますが——神の前に自分が神様ではないんだということをいつも思い出すということがひとつだし、そしてもうひとつは、その神様が出会わせてくれた人たちを尊敬する、その中に神様の呼びかけがあるんだという、そういう意味でいろんな人に出会いますが、それを自分が点検して判断していくという立場ではなくて、そういう神様から与えられた色々な出会いを通して学んでいくという、そういう姿勢につながるために、わたしたちは神様をいつも信じるということに立ち帰るように呼びかけられているのではないかなと思います。

間もなく、今度の水曜日から四旬節になりますけれども、四旬節はまさに回心の時——もし自分が振り返ってみて、周りの人に対して自分が正しくて相手が間違ってるんだっていう思いの中だけでいるようなことに思い当たるならば、もう一度、神様の恵みに信頼して立ち帰っていく、改めてまた謙遜になって、周りの人への尊敬、そして自分自身もいつも正しいんじゃないんだということを思い出す機会にできたらなと思います。

今日もわたしたち一人ひとりの心に訪れて、そして神様の望んでいらっしゃる、また神様がわたしたちに伝えたいことをよく見えるように心の目を開いてくださるイエス様の恵みに信頼して、お互いのために恵みを祈り合いたいと思います。

---

ミサ説教はカトリック高円寺教会ホームページの「ミサ説教」のページにも掲載されています。

PC <http://www.koenji-catholic.jp/cgi-bin/wiki/wiki.cgi>

携帯 <http://www.koenji-catholic.jp/mobile/>